



山川
静夫

或る
アナウンサー
の一生

評伝 和田信賢



文春文庫

424—1

或るアナウンサーの一生 評伝和田信賢

定価はカバーに
表示してあります

1986年6月25日 第1刷

著者 山川 静夫

発行者 西 永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3—23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-742401-0

文庫

或るアナウンサーの一生

評伝和田信賢

山川 静夫



目次

序章	昭和十四年一月十五日	両国国技館	9
第一章	明治四十五年六月十九日	神田	23
第二章	大正十五年五月十四日	小石川	37
第三章	昭和九年一月十三日	慈恵医大	53
第四章	昭和九年五月一日	愛宕山	69
第五章	昭和十一年七月一日	戸塚球場	85
第六章	昭和十四年四月一日	内幸町	101
第七章	昭和十六年十二月二十一日	九段	117
第八章	昭和十九年五月十八日	北千島	133

第九章 昭和二十年八月十五日 第八スタジオ 149

第十章 昭和二十年九月七日 山形 165

第十一章 昭和二十一年十一月十九日 メモリアルホール 181

第十二章 昭和二十七年六月二十八日 大岡山 197

第十三章 昭和二十七年七月二日 羽田 215

第十四章 昭和二十七年七月十九日 ヘルシンキ 231

第十五章 昭和二十七年八月十四日 パリ 247

あとがき 260

山川さんの文業について 三国一朗 264

単行本

昭和58年5月日本放送出版協会刊

或るアナウンサーの一生——評伝 和田信賢——

序
章
——昭和十四年一月十五日——
兩國國技館

双葉山はいつもの通り起きた。普段とまったく変りない。軽い朝稽古をしてからさっと風呂で汗を流し、ひげをあたると、いかにも無敵の横綱らしいふっくらとした、だが、浅黒い精悍な双葉山がそこにあった。

初日の関取衆といえば誰でも多少の興奮に心をゆすぶられるものだが、双葉山は落ち着きはらっている。どこを押しても突いてもゆるぎない自信が満身からほとばしり出るようで、むしろにくにくしいほどであった。

無敵の双葉山を倒すのは誰か——昭和十四年一月十二日初日で迎えた春場所、天気はよく、五十銭の大衆デーとあって、両国の国技館は大観衆でふくれあがった。

正午に双葉山は朝昼兼用の食事を平静の中にとった。鯛の塩焼、鯉の洗い、生鳥賊なまいかの刺身、めばるの甘煮、あんこうのちり鍋、さすがに横綱にふさわしい豪勢な料理である。

ただ豪勢と見えるだけではなかった。材料をえらぶ立浪部屋の料理番たちは、今場所も勝ち続けてほしいの縁起かつぎに神経をとがらせているのである。鯛は魚の王者、鯉は滝のぼりの勢いのよさ、鳥賊の白い身は白星を意味し、めばるは口や目を喝かつと見開いて猛々しく戦う願いがこめられ、あんこうは「鮫鯨」の漢字を当てれば横綱無敵安泰ということになる。しかし、こんな縁起料理がなくても双葉山の連勝は誰も阻むことが出来ないと思われた。

場所入りしても双葉は静かだった。なじみの記者やひいきの客にも過不足のない応対をし、青と黒の細かい格子縞のドテラを羽織った支度部屋で、床山の手で大銀杏が結いあげられていた。

美しい太鼓腹を見せて土俵入りをした双葉山は、いつもの土俵と一寸様子が違うことに気付いていた。このところ場所ごとに相撲が激しくなっていくせいか負傷者が多いのである。それについて、大日本相撲協会は、土俵が高く角土俵が狭いためだという指摘をうけたので、前の場所から土俵を三寸低くし、角土俵も三寸ひろげたが、更にこの場所では、高さを二寸低くした。つまり去年の秋場所の土俵とくらべると、高さは五寸も低くなっている上に角土俵も拡がっているから、土俵に上った時に、随分様子が違うな、と感じても当然である。双葉山の目に、土俵は極端に扁平にうつった。去年の双葉と今年の双葉をとりまく環境の違いと言えば、ただこの一点だけであった。

こんな些細なことが不安材料になってたまるかともいうように双葉山は、初日、五ツ島を寄倒し、二日目は龍王山を難なく突き出した。ただ、将棋の木村名人は初日の相撲を見たあと、「双葉山は先人の長所をにくらしいほど自分のものにしてているが、双葉とても欠点がないわけではないと思うから、その中誰かがそこにつけこむでしょう」と評している。

二日目までは双葉山だけでなく、横綱男女ノ川、大関の前田山と鏡岩は、堂々とした取り口で相手を問題にしなかったが、三日目に大関の鏡岩が、人気の両国の得意の下手投に敗れた。

波瀾といえはこのくらいのもので、三日目の結びの一番双葉山に挑戦した駒の里は無謀にも右四つに横綱とわたりあつて、あえなく上手投に敗れた。双葉は揺るがない。しかし、この日初めて三階席か四階席あたりから、

「双葉敗けろい！」

という罵声がとんだ。あきらかに双葉が強すぎて面白くないという相撲ファンの正直な声だったが、横綱は悠々として六十九連勝を飾った。

あくる四日目、一月十五日は快晴の日曜日で、しかも「藪入り」であつた。奉公人の多い両国界隈は、どの店も宿さがりあとの閑散とした空気がただよっているが、路上の方は、今日明日の二日間思い切り羽根をのばして遊んでみたい一心で、おろしたてのお仕着せに、角帯、鳥打帽子の小僧さんたちが寒気に肩をすくめて足をいそがせている。

うち続く好景気で、どこの興行も大入満員だつた。上野の鈴本では、後から後から突っかけてくる客を收容しきれず、しまいには楽屋口から入れて高座の上にまで押し上げるといふ有様である。有楽座では古川緑波一座で「遠山の金さん」が大当り、その上、「ロッパ・フォーリーズ」に登場する「あきれた・ぼういず」の四人組がロッパ以上の人気をさらっているし、浅草公園劇場の不二洋子・伏見澄子の女剣劇にも客は殺到した。だから尚更のことに国技館は「藪入り」の格好の標的となつた。

好取組の連發に沸き返る大相撲春場所第四日目の十五日は第三日曜と「藪入り」とが

ち合つて初日以上の大入りを豫想され、三日目打出しの十四日午後七時頃から早くも店員や小僧さん部隊がどつと押掛け同九時には早くも約五百人がぐるりと國技館を取巻いてしまつた。

二日續きの休みに、三、四階の大衆席を狙う小僧さん部隊は大川端から吹きつける寒氣もものかはと兵糧を腰に、このまま霜凍る一夜を待ち明かすという凄さ、終電車が近付くにつれて包圍陣は益々膨らんで電車通まで溢れる始末。此熱心な夜明し部隊の物凄い押しの一手を協會側が土俵を割つて開門するか、この儘夜明けまで待ち通すか、土俵以上に興味ある取組であつた。

同十時過には刻々と増してくるファンに流石の協會側も耐えきれず遂に開門。

徹夜を覺悟の小僧さん達「占め占め」と大喜びで場内に雪崩れ込み、先ず四日目の勝負は小僧さん部隊の白星から――。

十五日の「東京朝日新聞」の朝刊の記事である。この日の熱狂ぶりが手に取るように分る。國技館はこうしてあつというまに二万人の觀客を呑みこんだ。

2

東京中央放送局では連日実況放送をしていた。

相撲放送の幕あけは、昭和三年一月のことである。当時、大日本相撲協会の一部では、ラジオで相撲を中継したら肝心の国技館へ客が来なくなるという危惧を抱き、猛烈に反対した。それに、新聞社も、せっかくの記事が二番煎じになっては大変だという気持が手伝って、あんなものを許してはいかん、と相撲協会の年寄に吹き込んだ。

だが、元両国の出羽ノ海だけは、ぜひやってくれと、わざわざ愛宕山を訪れた。

「ラジオという立派な文明の利器を使って、もし相撲が衰えたり、客が来なかつたりした時は、もはや相撲自体が大衆から見放された時なんです。私が全部引き受けるから、ぜひやって下さい」

いっごく親父で定評のある出羽ノ海だったが、この言葉が生まれた。相撲放送が始まるや相撲ファンは茶の間にとどまるどころか、一層の興奮をかきたてられ、以前にも増して多くの人々を国技館へ運ばせるようになった。昭和十四年あたりの相撲熱は、実は、ラジオが駆りたてていたと言ってもよい。

その頃、通称「ヤマ」と呼ばれていた愛宕山の東京中央放送局が次第に手ぜまになり、昭和十年十月から千代田区内幸町に建設中だった新館が、十三年の暮に完成し、協会本部や事務部門は十二月二十一日までに移転を完了していたが、放送部門だけはそのまま残留して年を越した。したがって、中継要員のアナウンサーや技術係は、初場所も今までと同じように愛宕山から国技館へ通っていた。

相撲を初めて実況したアナウンサーは松内則三である。昭和三年当初の実況放送といえは、

「左四ツ」「右四ツ」の区別さえ咄嗟には言えないほどの描写力だったから、その苦勞ぶりが察せられる。

相撲の取り口通りにアナウンサーが表現出来るようになったのは大分あとになってからであった。最初は仕方なく、相撲にくわしい石谷勝という「国民新聞」の記者にたのみこみ、松内アナウンサーの隣に座ってもらって、勝負がすむと石谷が簡単な文章にし、それを松内に渡す。松内はそれを「ただいまの取り口」として読み上げていたらしい。てんやわんやの舞台裏であった。

相撲放送をはじめる以前は、仕切り制限時間というものはなかった。いわゆる阿吽あうんの呼吸が合うまでは無制限に仕切り直しをしていたのである。これではアナウンサーがもたない。そこで、昭和三年一月の相撲放送開始とともに、幕内は一〇分という制限を設けた。力士たちは初めて制限時間にすっかり戸惑って、三、四回の仕切りで立ち上ったからたまらない。取組が猛烈なスピードですすみ、初日の打ち出しが午後五時四十分、中継放送の開始が五時二十分だったから、日本初の相撲中継は結びの一番を伝えただけで終るといふ珍無類の放送になったという笑い話も残っている。

仕切り制限は設けたものの、一番の取組に一〇分間近くもしゃべり続けなければならない実況アナウンサーは、間をもたせるために大変だった。久保田万太郎とか久米正雄らが助っ人を買って出て、棧敷で川柳を書いて渡し、それを読み上げることで間をもたせたこともあった。緩慢とも思えるほどのんびりした仕切りから、立ち上ったあとの相撲は様相を一変させる。目